

25  
2019

# 創 造 人

Creative People

早稲田大学 創造理工学部・研究科 広報誌

Interview

社会的な問題を見つめることで、  
建築物の新しい形が見えてくる。  
建築を通して社会とどのように関係していくか

MEMジャー／建築学科

**吉村靖孝**

博士(建築学)

フィールド  
半動産建築、半都市建築  
半情報建築

# Interview

創造人 25 — Yasutaka Yoshimura

## 社会的な問題を見つめることで、 建築物の新しい形が見えてくる。 建築を通して社会とどのように関係していくか

国内外を問わず、多数の建築物を手掛ける建築家として著名な吉村教授。近年はテント倉庫を利用したユニークな「フクマススペース／福増幼稚園新館」や、カラフルに色分けされた外観が目惹く「中川政七商店新社屋」などが話題を呼んだ。また、法規を頑なに守り存在する愛すべき建築物を収めた「超合法建築図鑑」(彰国社刊)の著者としても知られる。常に新しい切り口で社会にアプローチする吉村教授が学生に何を授け、共に研究しようとしているのか、お話を伺った。



フクマススペース／福増幼稚園新館

研究のテーマは大きく分けて3つあるという。すべてに「半」の文字が含まれる点は特徴的だ。

「ひとつは「半動産建築」と呼んでいるもの。不動産と動産の間と言うような意味合いになります。例えばトレーラーハウスやキャンピングカーがこれにあたりますね。人々の多くはどこかに定住しながら日々の生活を送っていますが、そのために払う過大な投資が東日本大震災の時に大きな問題になりました。そのとき、もっとミニマムな空間の中でも暮らせるのではないかという発想を持ったことがひとつのきっかけになっています。これを拡張する形で、歴史ある日本のモバイル・アーキテクチャー「山車」を研究したり、海運コンテナの規格を流用してホテルや仮設住居を検討したりと行うを行っています」

「半動産建築」に関しては、近い将来の実用化に向けて世界的に注目が集まっている「自動運転車」もその範疇に含まれるのだそうだ。「移動手段としての利用が主だった「自動車」の空間。この意味合いが変わろうとしていますよね。こういった時代の変化の中から新しい可能性を探っていくのも重要な作業です」

研究対象はスケールを問わず、都市の範囲にまで及ぶ。

「都市のような機能を有している建築物を「半都市建築」と呼んでいます。海外には数十ヘクタールもの敷地を持つショッピングモールが実際にありますね。2000年頃に私がいたオランダでは「ピッグシティ」という養豚場超高層化プロジェクトがありました。オランダは世界有数の養豚が盛んな国。当時口蹄疫が流行っていたのですが、これを防ぐには1頭あたりの敷地面積を増やす必要があります。限られた国土の中で、人間の生活する土地を確保しながら同時に養豚を行うには、養豚場を高層化し、誕生から屠殺までをひとつの施設内で完結するのが効果的ではないか……。こういった思考実験を行うことは、新しい時代の建築を考えていく上で必要です」

動産、都市、そして今や私たちの生活に欠かせないのが「情報」だ。「もうひとつは「半情報建築」。情報空間と実空間の間を考えると意味合いでこの言葉を使っています。学部生時代、所属していた古谷先生の研究室で仙台メディアテークの設計競技に参加して2等をいただいたことがありました。この時に考えたのが、受付機能が不要になった図書館です。図書館は検索性能を空間が担っている建築物ですが、もっとカオスな状況でもいいんじゃないかという発想から、どこで借りてもいいし、返してもいい、携帯型情報端末を通して本の貸し借りをを行う図書館を提案しました。理路整然と本が並んでいる環境は検索しやすい反面、意外なものに巡り合う機会を損失しているとも言えます。今でこそ図書館に情報端末が備わっているのは当たり前になってきていますが、1995年当時はまだ実現不可能と受け止められ最優秀にはなれませんでした。」



キャンピングカー「ホーム2ゴー」



# Interview

創造人 ②5 — Yasutaka Yoshimura

吉村教授がこのような3つのテーマを大きく設けているのには理由がある。

「既存の縦割りの分類では整理できない研究内容が増えてきているというのが一番の理由。また、建築する上で他分野・領域との接合は欠かせません」

建築において、外部要因から受ける影響は大きいものがあるという。

「エレベーターの形状を考えてもそうですし、空調が存在しなければガラス張りの建物もまた存在し得ないでしょう。他分野とのコラボレーションで決定される部分が多いからこそ、さまざまな分野の専門家・スペシャリストとコラボレーションする機会は設けていきたいですね」

## 土地に応じた 「山車」の進化の系譜をたどる

建築を軸とし、広域なテーマを扱っている吉村教授だが、フィールドワークとして研究に取り組んでいるのが日本の祭りに欠かせない「山車」だ。

「先ほども少し触れた「山車」ですが、これを調べる際は街とセットで見ていくことが重要になってきます。毎年5月に岐阜県養老町で行われる高田祭りには計3台の山車が出るのですが、通る道が非



岐阜県養老町の山車

常に狭い。このことから、山車自体に回転機構が備わっているという珍しい例があります。ほかにも京都の祇園祭で出る山車は建物の2階から荷物が入られるようなつくりになっているなど、土地の状況に応じた仕様が盛り込まれています。私自身2018年に着任したばかりなのでまだサンプル数が少ないのですが、今後数を増やしてまとめていきたいと思っています」





## 暮らしを豊かにする建築物を生み出し 歴史に貢献できる人材育成を

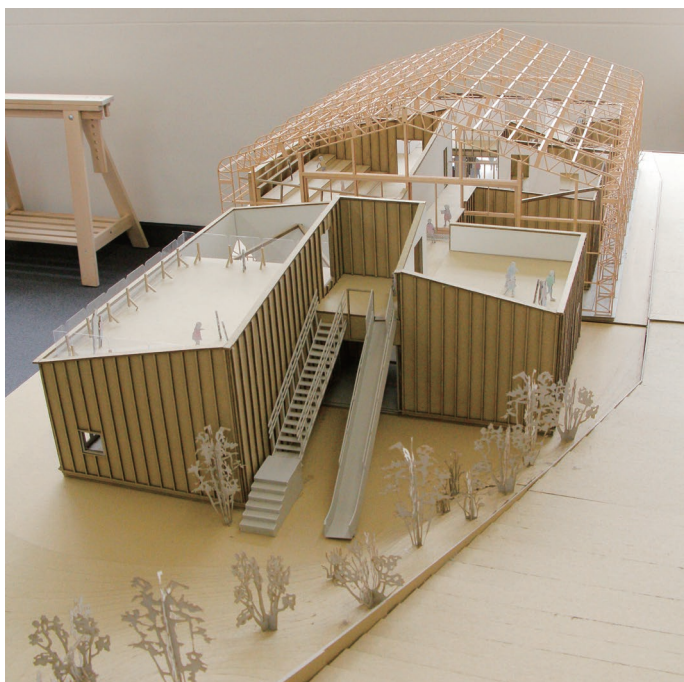
実務者として建築物に携わる上での想いについても伺った。

「基本的な考えとして、世の中によい建物を増やしたいという想いがあります。優れた建物を設計し話題になっても、それが大多数の人々の生活を底上げするところまでは至っていないのが現状。だからこそ、学生には私たちエンドユーザーが住んでいる建物にも目を向けてほしいと思っています。

日本で住宅を取得しようと思えば長期ローンが前提となり、生活を豊かなものにするはずの家が逆に人々の生活を縛っている状況がある。世の中の常識が幸せな社会を阻害している、この点を改善するにはどうすればよいかということを、ともに考えていきたいですね」

そのヒントとなるのが、近年の顧客ニーズの変化だ。

「人々の所有に対する価値観の変化を表す言葉として「所有から利用へ」と言われるシーンが増えてきています。十分に供給されているものに関しては所有欲が生まれず、シェアしたり、一定期間の利用にとどまったり、または次々に買い替えたりとさまざまな形で利用されている。人口減少期の日本において、家を所有するという感覚も確実に薄れていっています。このような変化を活かしながら、建築物を通してどのように社会と関係するかということが、学生にとって最も大きなテーマ。作り手側の思考に立ち、再現するつもりで建物を見て学び、見識を深めてほしいと思います」



フクマススペース／福増幼稚園新館の模型。奥がテント倉庫部分。



社会的な問題を見つめることで、建築物の新しい形が見えてくる。この考え方が吉村研究室の土台となっていることは間違いなさそうだ。

「社会的な問題が建築物のデザインを進化させてきたという事は、歴史を見ても十分に言えることだと思います。私たちはここで立ち止まらずに、建築物で社会によい影響を与えたい。大げさかもしれませんが、建築の歴史に貢献できる人材を育成できればと考えています」

洞窟やピラミッドなどの建造物から、脈々と積み重ねられてきた歴史の上に現在の建築文化が成立していることは言うまでもない。その歴史に名を刻む若者が吉村研究室から輩出されることを期待したい。